

## <論文>夢と虚無の彼方と現実世界：ドストエフスキの『作家の日記』の多様性(一)

著者	立石 伯
雑誌名	日本文学誌要
巻	59
ページ	3-18
発行年	1999-03-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00020039">http://hdl.handle.net/10114/00020039</a>

## 夢と虚無の彼方と現実世界

——ドストエフスキイの『作家の日記』の多様性(一)——

立石 伯

### (一)

どのような作家であれ、その晩年の精神の足跡をたどるたびに、深い感慨に誘われる。ある時期から作家がすっかりペンの運動を放棄する。また反対に死の直前までペンを握って臨終の床につく。さまざまな闘いのかたちは、精神生活と実生活上の実に多くの機微や秘密などをわたしたちに伝達する。それは作家の突然の誕生の偶然性と同じようなはかりがたさがあるためであろう。わたしは一般的にいつても、特にドストエフスキイのような作家にあつてはことさらに、作家の誕生にいたる隠された秘密と作家になる偶然性に多大の興味を抱くのである。

ドストエフスキイは、『作家の日記』発行以前に『地下生活者の手記』や『罪と罰』など多くの読者を震撼させるめざましい作品を発表しつづけた。大変な作家である。しかも四十歳代の後半の一八六七年に四度目の外遊を敢行した。この旅行は、そ

の遠因であり、直接の原因でもある、六四年に死去した兄ミハイルの未亡人とその子供の世話、また莫大な借金を両肩になわざるをえなかったことなどによる。彼は著作権を売り、さらに一年以内に長篇を渡し、もし違約があれば以降九年間の全著作権の無償提供などという周知のひどい条件での契約をある出版業者と結んだ。借金を返済するため、また外国生活の資金をえるために『罪と罰』の執筆などをはさんでの二年前、六五年の三度目の外遊のあとをうけての四度目の外遊というきびしい選択である。いわば債鬼におわれるかたちで、ヨーロッパの街々を逃げるように四年間少しの長きにわたつての彷徨となつたのである。にもかかわらず、その前の外遊と同様に、驚くべきことにその間に着実に『白痴』や『悪霊』などの優れた作品を書きつづけたのであつた。かくのごとくの類いまれな作家の精神生活は、晩年の作家としての瞠目すべき処世法である。またロシアの大地に足を踏みしめて、困難に堪えつつ生きかつ考える方法を尖鋭なかたちで垣間見せている作家の魂にほかな

らない。

さて、『ドストエフスキ全集』で二巻をしめる『作家の日記』(ДНЕВНИК ПИСАТЕЛЯ、以後の引用とも河出書房新社刊行の米川正夫訳にかかわる)を通読すると、彼の社会・政治などの評論や人物論などを読んだことのない読者、特に彼の長篇小説だけに親しんだ読者にとって、この書物はあまりにも奇妙な内容にみちあふれているのではないか、とまず感じられるであろう。文学作品として、一体これをどのような範疇にいれるべきかと戸惑い、そこに展開された認識の側面においても奇異の念を感じさせられ、ついには明快な焦点を結ばない知識の横溢のなかにはまりこみ、その底が解らない深い泥濘に膝まで沈みこむ印象にとらわれるに相違ない。というのも、まず、ここには極端なかたちでイデオロギッシュなジャーナリストとしてのドストエフスキが貌をのぞかせているからである。他方、作品数としては少いとはいえ、驚嘆すべき形式・内容をもった後期の短篇小説群が混在しているからにはかならない。この間の落差をどのように測るべきか、いささか戸惑うにちがいないからでもある。

のちに詳しく分析するが、『作家の日記』のなかで最も瞠目すべき作品だと多くの人が驚きをもって読むであろう「おかしな人間の夢——空想的な物語——」(一八七七年四月、第2章)の一節をまず一瞥し、その小説的世界の性質を目測する資としたい。一言でいって、ここには「わたし」とは何かという根源的な問いにはじまり、他者、共同体と社会、世界の存立する根拠、さらには宇宙の闇とその観念などの本質的な部分を伶俐な

鑿で鋭く切りこんでいく様態が遠望される。それによって未明の宇宙の果てを夢において確実に印づけ、未知なるもの、無限というものを想像する人間を見事に描きだしてしまうのである。またこの小宇宙にこそふさわしい特異な文体をも柔軟な感性によって創り出しもするのである。

主人公はいったいなぜ、いかなる偶然でこのような小世界を夢見たのか、多くの人々は批評の言葉を失って不可解だとすら感じざるをえないほどなのである。〈死者の意識〉を透視したその一節のみをまず引用で示しておく。

「すると、忽然、おれの墓がさっと開いた。といって、だれかが墓を掘りあげたのかどうか知らないが、おれはだれともしれぬ模糊とした存在に抱き取られて、二人はいつしか無限の空間の中にいたのであった。おれはとつぜん目が開いた。それは深い深い夜で、このような暗さはかつてどこにもなかった！ おれたちは、もはや地上遙かに離れた空間を翔つていた。(中略)夢の中では空間も、時間も、存在と理性の法則も飛び越してしまつて、心の夢見る点にのみ停止するものである。とつぜん暗黒の中に一つの小さな星を認めたことを、おれは覚えていた。」

ここに示された奇怪な感受性、不可解な識知能力などを暗示する「だれともしれぬ模糊とした存在」や暗黒のなかの「一つの小さな星」など、そして何よりも独特な《夢のありよう》についてはのちに考えることにする。ともあれ、右のような夢の

世界の特異なあり方があたかも現実的感性の世界として、想像力のある極限のリアルな貌のごとくに提示されているのである。

ところで、三十数年前の二十歳代の頃に、全集を読み通す上で、全体の一部の数巻として読み切ろうとしたおりにも、やはり右に示した感嘆や感想にほぼ近いものを抱いたはずである。けれども、雑然と詰めこまれた小説や政治論文などのあまりの煩雑さに、めばしい部分だけを拾い読みすることでお茶をにごしたことを臍をかむ思いでまざまざと想起する。それから十数年してこんどは、ドストエフスキイの精神世界全体を展望する目論見のもとに腰をすえて読み通すと、百数十年も前の文章であり、国情や社会状況などがおよそ異質でありながら、そこに展開されていることの多くは、日本という極東の国に生きるわたしに、今も生命をもって胸をゆするようになぐ間近から呼びかけてきたのである。めざましい文章独自の力に直面して嘆息したのである。しかしながら、構想されたそのドストエフスキイ論そのものは、さまざまな事情のために途中で放擲してしまった。これまた内心忸怩たるものがある。そして今、何度目かの読書が再開されたということになる。

雑誌発行についての執着という点からいえば、ヨーロッパを四年間少しも転々とする前に、彼はすでに兄ミハイルと六一年に「ヴレーミヤ」を刊行し、またその雑誌が発行禁止処分を受けると、六四年に発刊されたミハイルの雑誌「エポーハ」を援助した。彼はすでに、検閲制度の網が緻密に張りめぐらされた帝政下において、雑誌によって何がどのようにできるか、どの

ような性質の文章や思想などが公表できるか、その文学的・思想的な可能性と不可能性に通曉していたといってもよい。ドストエフスキイが帰国して間もなく友人のA・H・マイコフなどにB・Π・メシチェールスキ公爵のサークルにつれて行かれた際に、雑誌編集の話がでるとすぐに興味を示したのは疑いあるまい。ドストエフスキイはロシアの現代の諸相や現代人のありようなどを解き明かすために、つまり時代の動向についての所感やそのテーマ化された状況論、あるいは小説などを発表するための雑誌をもとめていたからにほかならない。

引き受けてはみたものの、当初彼は『作家の日記』をどのような形式にすべきか明確な意図はなかったであろう。漠然とではあれ、この『日記』を実にさまざまなモチーフや範疇のもとに書きついでいき、自己表現の新たな位相を見出そうとしたはずである。渡りに船だと求められるままにメシチェールスキ公爵の週刊誌「グラジダニン」の編集統括者として、どのような運びになろうとも、まず手がけてみようとしたに相違ない。この公爵は、J・グロスマンによれば、ロシア保守主義者の首領で、宮廷に大きな勢力を持ち君主や権力と関係をつけたやり手であつて、ドストエフスキイがこのような男と接近したことは「悲しむべき事件」であり「最大の過ち」(『ドストエフスキイ』北垣信行訳)だとすらのべたのであつた。ともあれ、一八七三年創刊号の『作家の日記』欄序で、「わたしは自分一人だけの楽しみに、この日記の形式でひとりごとをいおうと思つている。」とその心意のいったんに触れている。

しかしながら、グロスマンの批判したような性質の人であつ

たためか、思想的にも表現上でも、自在な編集のできなかった彼は、一八七四年に編集責任者を辞職した。そして、心機一転七六年再刊のかたちで、今度は彼個人の月刊雑誌として『作家の日記』を刊行しはじめたのであった。その意図を一月号の序にかえてでつぎのように述べている。なぜ「作家の日記」などという題をつけたのかという想定されたある読者の問の答えとして、それに解答を与えること「これは非常に困難なことである。それに、わたしはどうも序文を書くのが得意でないらしい。」と韜晦する。あるいは、「その道の人たちの目にはきわめて幼稚なものであるが、わたしは自分のためにこの『日記』を書いているのだ。」（一八七六年二月・第2章1）などと単刀直入に述懐する。断るまでもなく、論述の節々で、書き進めている文章のモチーフや対象にしたがってさまざまにいいかえながら刊行の意図を述べている。「昨年、自分の『日記』を発刊するにあたって、文学批評はやるまいと決心したのではあるが、ここで多少、自分の感想を披瀝しなければならないはめになった。（中略）わたしは自分の『日記』を書いているのだ。つまり、目前の事件の中で、最も強い衝撃を与えたいっさいについて、自分の印象を書きつけているのだ。」（七七年七月・八月・第2章2）煩雑なのでこまかに引用をかさねないが、基本はすでにのべたとおりである。

彼は十八世紀当初のピョートルの改革以降というかたちで特定の世紀や時代を限定しないで七三年の序文でつぎのように嘆いた。永い見通しでいえば、ロシアでは、「千年くらいききまで、何もかもがとんぼ返りを打っている有様だ。」と。そのような精

神世界と歴史的時代の混沌たる状況を前にして、十九世紀後半に生きる自己の位置を柔軟に設定しようとしたのである。現在と歴史に対して無碍に対応しようとしたのもあった。『作家の日記』において、イデオロギイという言葉をあえてつかえば、その核心となっている西欧派とスラブ主義の対立、そして彼一流の手法だといふべき両傾向の和解の努力とそれらのあり方と方向性、またその足取りとロシア文学界・思想界・言論界などの核心的な性質の剔抉に心を注いだのである。

おびただしい社会評論、追想（人物月旦）、文芸批評、裁判批判等をふくめた社会批評、政治思想、戦争論、またそれら見解などへの批判に対する反駁文、随筆、自作注釈などの群の中に、ところで十篇ほどの短篇小説がちりばめられているのは既述の通りである。それらの文章群は、めくるめく人間の生命感の躍動と理念の生き生きした活動と、ロシアの目にみえない伝統的基盤と鬱勃たる息吹をくみ取って、めざましい達成を示している。ドストエフスキの後期の長大な小説群とは趣を異にした独特で特異な文章世界が息づいているということが出来る。

ところで、ここでわたしの考えたいのは、右に記した問いのなかにすでに示されているように、社会評論などを中心とするきわめてジャーナリスティックな側面と、十篇ほどの短篇小説そのもののありようとその意味を解き明かすことである。後期の卓抜した数作の評論はもとより、そこには暗黙のうちに、すでに発表された彼の長篇小説群と、これから書かれるであろう作品世界の在りようなどが一種のノートのかたちで念頭におかれてあることになる。いいかえれば、短篇小説群が『作家の日

『記』にちりばめられている構図のなかに、作家自身の将来の方向性の措定と、小説の冒険が敢行されている消息がひめられているということにほかならない。

ここで取り上げる作品は、短篇小説として完成した構造をもつものと、長篇小説の一節に類するものと、単純なデッサンの三種類がある。発表年度順に列記する。「ボボーク」ある男の手記（一八七三年6）「キリストのヨルカに召されし少年」（七六年一月第2章）「百姓マレイ」（二月第1章）「百歳の老婆」（三月第1章）「現代の婦人に恩恵を受けた男の一人」（七月・八月第4章）「宣告」（十月第1章）「おとなしい女——空想的な物語——」（十一月）「おかしな人間の夢——空想的な物語——」（七七年四月第2章）「現代生活から取った暴露小説のプラン」（五月・六月第1章）「裁判長の与えた架空の訓示」（七月・八月第1章）。これらの作品題をかつて米川正夫もあげたことがあるので周知の事実に属するであろう。『作家の日記』のなかには、小説的追究技法によつて現代的事象を断片的に考察しようとする文章が他に相当あるけれども、ここで考察する暇がない。一言でいっておけば、彼の現実に生起するさまざまな出来事にたいする感情の動きかたや想像の仕方などが生き生きと叙述された文章群を望見できる。

作者が『作家の日記』のなかになぜ突然それらの虚構化された文章を挿入するにいたったか、その言訳めいた叙述や主張を瞥見してみる。さまざまな性質の論文から距離をとつて、作者が小説世界へと離陸・飛翔する一つの方法は、つぎの通りである。「ボボーク」では、その前の節に「諸君はヴラス（ネクラー

ソフの詩）を記憶していられるか」として、その内実を積極的に評価・分析し、その後を受けて、「今度は『ある男の手記』を掲載することにしよう。それはわたしではない。まったく別な人なのである。」と記すことから始める。「百姓マレイ」では、一つのアネクドット、「要するに、一つの遠い昔の思い出にすぎないのだが、わたしはなぜかそれをとくに民衆論の結びとして、今ここで語りたくてたまらない。」として語り始める。「百歳の老婆」の場合は、ある婦人から聞いた話で、「ごく軽い、主題もなにもない一場のスケッチである。」とする。「宣告」は、「ここでついでに、退屈のために、自殺したある男、もちろん、唯物論者のある考察をお目にかけよう。」と叙述する。「裁判長の与えた架空の訓示」においては、「次にかかげるのが、裁判長の彼らにいったでもあらうと思われる言葉である。」としてその言説を想定する。これらが、その直前の文章まで日記のかたちで分析的に書かれていて、突然小説的世界に昇華される助走部分をなしていたり、書き・語り終わっていいわけをしていることは明白であろう。

小説の内的構造としても注目される「おとなしい女」は、その序説自体が興味深いのでちに考察するとして、もう一つの書き出しのタイプは「現代生活から取った暴露小説のプラン」がよく示している。「ところがさて、わたしはまだ匿名の悪口者のことを終わってはいないのだ。ほかでもない、こういったふうの人間は、長編なり中編なりの材料として、きわめて深刻な文学上の典型となり得るのだ。その際、肝要なことはすつかり別な観点、つまり一般的人道的な観点からながめ、かつそれを

一般にロシヤ的性格と融和させ、とくにこの典型が現在わが国に出現した時代的因果関係と、背馳しないようにすることが必要であり、また可能でもあるのだ。」そして性格の「研究」をおえると、「これを要するに、匿名の罵詈雑言の典型は、小説としてなかなか悪くないテーマのように思われる。しかも、まじめなテーマである。(中略)ほんとうに長編の挿話として使うかもしれない。」と宣言する。もとよりつぎの章の論題の書き出しに、「わたしは本題を離れて、どこへ迷いこんだことか」と反省し、またまた韜晦する。

右に細々とみたのは、『作家の日記』のなかの小説的記述の方向性や特質を確認するためであるとともに、作者の作家的資質の一端を垣間見るためでもあった。以下に考察するごとく、彼の虚構化の特質は、きわめて身近な素材、現実的事実、ありふれた現在の細部などの底にひそんでいる微妙で深い人間的・時代的・思想的動向・課題などを感覚的・趣味的次元の饒舌にとどめないで、小説の言葉へと昇華してしまう精神の努力にほかならないのである。

この『日記』に挿入された最初の作品「ボボーク」から略述しよう。この作品の世界は、「おかしな人間の夢」とならんで忘れることのできない小世界を顕現させているのである。周知のように「ボボーク」について、ミハイル・バフチンが『ドストエフスキイ論——創作方法の諸問題』（新谷啓三郎訳）でのべたように、「その深さ、大胆さからいって世界文学中最も優れたメニッペアのひとつ」であって、「彼の全創作の殆ど小宇宙となっており、彼の創作——それ以前のも、それ以後のも——非常に

多くの、しかも最も重要なイデオ、テーマ、形象がこのなかできわめて鋭く鮮かに露呈している。」とのべたような要素を確かに内包している。メニッペア、メニッポスの諷刺の概念については触れない。ポリフォニイ小説とカーニヴァル論をその論の中心とするバフチンの優れた論考は、べつに検討することになるであろうが、わたしのこれらの小説群の分析においては意図や方向性が異なるので特に取り上げて云々しない。

この短篇小説の特異な相貌は、すでに述べたように想像力のある極限を暗示している点に端的に示されている。さらに、小説の主題的なもの、言葉で表現可能な世界の境界などをいみじくも開示している側面にも如実にあらわれているであろう。さて、語り手は、額に対になった疣をもつのだが、それを克明に描いた画家の手法をリアリズムと称する世間、「きょう日ではユーモアとか、あやのある文句というものは影をひそめて、悪罵が機知として通用している」時代の趨勢のなかで、いかなる理由でか「気持ちが」と誹謗されることになった自己を徹底的に内省する。すると彼のそばでささやかれる「ボボーク、ボボーク!」という幻聴をきくようになり、その来歴を語りはじめるのであった。語り手の生死の観念を根本から揺動させる認識から素描していこう。

彼は遠い親戚の葬式のために二十五年ぶりに墓地に行き、死者たちの夢にまで見そうないやな顔、墓穴の緑色をしたおそろしい水、墓碑銘の常套さなどにうんざりして、長い間石の上に横になっていた。すると、地下の墓から会話がきこえてくるというプロローグが配されている。ロシアのあらゆる階層をふく

む「目ざめ」た死者たちは、たまらない臭いをさせながらカルタ遊びをしたり、もう少し生きたかったと叫んだり、つまり地上のありとあらゆる悪徳や愚昧な言行を披瀝しあうのであった。「さまざまな偶然によって、この首都における行政上の新事実を知ることができるものだと、一驚を喫した次第である。」いわば、数日という時をおいて、横たわる距離も数歩から十数歩のあいだの目ざめた死者たちのこの野放図な有様について、語り手はこういうざるをえない。「いけない、わたしはもうこんなことを許してはおけない！ これでも現代の死者なのか！ けれど、もう少し聞くことにして、結論を急ぐまい。」

彼らはここには「生氣と頓知」が不足している、「この生活からでも、好きなものが引き出せそうな気がする」、さらには「かんじんなのは、残った時を愉快に送ることですな。が、それはどういう時なのでしょう？」などとほぼ解明不可能な考えを平気で吐きだしたり、またその上に「なんせ、ぼくらは死んだものじゃありませんか、それだのに話をしている、おまけに動いてもいるようです。そのくせ、話もしなければ、動いてもいないんですからね？ なんとというきてれつなことでしょう」とも嘯く。その極限でつぎのような《死後の生》についてかたりもする。

『彼の説明によりますと、われわれがまだ娑婆で生きていた時には、あちらの世界における死を、粗忽にもほんとうの死と考えていたからで、きわめて簡単な事実なんだそうです。肉体はここでもういちど生き返るというようなわけ

で、生命の残りが一つに集中する。けれど、それはただ意識の中だけです。これは——どうもなんといいたらわしたらしいのか、わたしにはわかりませんが、——まあ、生命が惰性にしたがって継続する、といったようなあんばいなんです。彼の意見によりますと、すべてが意識内のどこかに集中されて、なお二、三か月……時には半年も継続するんです。』

これにつづけて、ある男は肉体が解体したにもかかわらず、六週間に一度だけ、なんの意味もないことば、『豆粒がどうかしたというのです。』「ボボーク、ボボーク」って。『呟くとのことである。べつの男は死後のありようをしめすきわめて示唆的な術語、『精神的な臭い』、『魂の臭い』について云々する。さらに、このこの住人のあるものは、『この生活を、いわば新しい、今度こそ合理的な基礎の上に築こうと提議なすった気持ち』がよく解るとすらいいます。

かくしてこの地下の世界では、羞恥心をうしなつて「思いきり破廉恥な真実の中に生きようじゃありませんか！」と互いに催促しあうようになり、またあらゆるものが混交・溶融され、あるいは転倒され「娑婆ではなるほど將軍だったが、ここじゃ豚の脂です！」と立場の転倒が実現されるのである。つまり、それらの応酬の挙句に「長い猛烈な咆哮や、反対の叫びや、騒然たるどよめきが湧きあがった。」状態に陥り、なによりも死者たちの「魂が地獄の試練にかかっている」という認識すら提示されるにいたるのである。これは明らかに諧謔であり、死の意



味をも一挙に逆転させるカーニヴァルの技法の駆使にほかならない。

このような死者たちの乱痴気騒ぎが中断され、物音一つきこえなくなったのは、語り手がなんの底意もなくとつぜん噓をしたからにほかならない。死者たちの突然の沈黙について、彼は「彼らには生きた人間の知らないある秘密があつて、それをあらゆる生きた人間からひたすら匿そうとしているに違いない」と結論づけることにしたのであつた。だが、彼は克明すぎるといえるほどに地下の世界の有様を一種の幻聴において聞きとりつつも、これらのすべてに反対して小説の終りにつぎのような見解を提出する。

「いや、わたしはこんなことを認めるわけにゆかない、いや、ほんとうにできないのである！ わたしを当惑させたのはボボークではない（それはつまりボボークにすぎなかつたのだ！）。

ああいう場所における淫蕩、最後の希望の崩壊、腐つてぶよぶよした死屍の放縦、しかも意識に与えられた最後の瞬間さえ惜しもうとしないのだ！ 彼らにはこの瞬間が与えられていたのだ！ 賦与されていたのだ！ そして……けれど重大な点は、重大な点というのは、それがかかる場所で行なわれたということである！ いや、わたしはとうていそんなことを認めるわけにはゆかない……」

くり返すまでもなく、語り手の現実的な認識、美意識、道徳

観、生死観、人間観などが根底から、決定的にゆりうごかされてしまふのであつた。それを見事に実現したのは、想像的世界での諸事実を、あたかも現実世界の出来事であるかのように、独特な抑揚、癖、諸諷、黒々としたユーモア、渋滞の多い文体で書き進めることができたためであつたということが出来る。

独特な死の観念を語った作者は、「宣告」においては、退屈なために自殺したある男の内面を素描するに止めている。彼はドストエフスキイがかつて渾身の力をこめて創り出した一種の《地下室の人間》にほかならない。つぎのような地下室人特有の考えを提示するのも故なしとしないのである。「おれは意識あるものとして創られた、ゆえにこの世界を意識した。自然はいかなる権利をもつて、人の承諾も得ないで、おれを意識あるものとして生み出したのか？ 意識するものとは、とりもなおさず、悩むもののいいだ。」意識して選択するとすれば、もちろん、おれはただ自分が存在している間だけ幸福でありたいと思う。全体だの調和だのというものは、おれが無に帰してしまえば、その全体や調和がおれの死後この世に残ろうと、またはおれといつしよに亡びてしまおうと、われ関せず焉である。」彼は当然、人間の幸福、理知、道徳、主義、科学的基礎の上に築かれた生活などを強いることになる自然の法則に憤激し、屈辱すら感ずるのである。そして、自然は彼の問いかけに答えないし、あまつさえ説明を要求する権利すら認めてくれないと直覚したので、彼はつぎのように宣告してこのアフォリズムのような断章を結んだのである。「かくも無作法にずうずうしくおれを苦難のために生み出した自然を、おれとともに破滅すべしと宣告す

る……が、おれは自然を滅却することができないから、おれ一個を滅ぼす。』このような自殺者の素描は、作者が当時の新聞や雑誌の記事などに触発された一考察であるにしても、『日記』の作者にしては異質なものを書き添えたということになるのか。すぐつぎの章が、「近東問題の新段階」であることを指摘するまでもない。

死や地下室人をあつかった右の典型的な短い小説やアフォリズムなどと異つて、ペテルブルクの都市生活を印象深い単色の灰色で浮きあがらせた一群のスケッチがある。「キリストのヨルカに召されし少年」は、語り手が〈創作〉しつつもあたかも「ほんとうにあつたことのような気が」するリアリティをもつものである。住む部屋もない病気の母をもつ六歳ほどの少年が窮死する都市の片隅の素描であつた。彼は恵まれた階層の少年たちがキリストのヨルカの下で、降誕祭のお祝いをしているのを羨望しつつながめていて、当然そこから蠅のように追ひ払われて、恰好の休息所として見つけた薪の後ろで見事なヨルカを幻想のうちにみつゝ凍死してしまう悲惨な物語である。語り手はこの少年が、そして棄てられた死んだ子供たちが「だれもかれも天使のようになり、だれもかれもキリストの子になっている。そのキリストはみんなのまん中に立っていて、一同に手をさし伸べながら、子供らとその罪深い母親を祝福している」情景を点綴し、彼らを救済しておかざるをえなかったのである。そしてつぎのような反省も。「いったいわたしはなぜこんな物語を創作したのだろう、ありふれた分別くさい日記、しかも作家の日記には、およそふさわしくない物語！」と。

このスケッチと同様な小品が、「百歳の老婆」である。ここでは作品世界の分析を省略し、作者の発想法と「死の真実」に触れた一節を目に留めることにする。語り手は精神生活の充実した百四歳になる老婆に出会うことはめつたにないとして、「どういうわけか一瞬の間に、彼女が孫たちのところへ行き着いて、ご馳走になつたという、後日譚を想像の中に描きあげた。こうして、も一つ小さなスケッチができあがつた。もしかしたら、大いにほんとうらしくできたかもしれない。」なにげない叙述のなかに、ドストエフスキの発想の根源的なありように逢着するであろう。一方で語り手はつぎのような感想を付け加えている。

「この少年が死んでしまつたら、かつて昔こうした老婆が存在していて、なんのために、またどんなふうにか知らないが、百四年も生きのびていたということを、この地球上にだれひとり知っているものも、覚えているものもなくなるわけである。それに、またなんのために覚えている必要がある。そんなことはどうでも同じではないか。こうして、幾百万の人がこの世を去つて行く、——だれの目にも入らぬ生活をして、だれの目にも入らないように死んでいくのである。」

語り手は「一種人を感激させるような、静寂に充ちたあるもの」を、いわば生者と死者の微妙な関係のありようをここから導きだしたのである。それが一種の普遍性へ高められているこ

とが解る。

これらとはやや色彩の異なる小編がある。先に小説のプランやテーマの開示として略述した「現代生活から取った暴露小説のプラン」や「裁判長の与えた架空の訓示」などである。これらは、あの少年や老婆とは異質な、理念的な衣装をまとっている。文字通り十九世紀のロシアの教育体系、家族の問題、とくに偶然の家族というテーマや子供をおして愛情の貴重さを再認すること、人類社会の未来的なあり方や「現代」社会の更正への道のりを提示することなど、興味深いモチーフが提出されているであろう。疑いなく、作者の作品世界の系列の一定の場所をしめるべき部分ではある。けれども、教育評論家的な見解、戯画化の技法などを論ずるのは別の機会にまわし、紙数の関係もあり、割愛する。ただ一点、「現代生活から取った暴露小説のプラン」は、現代にも通ずる人間の讒言の一般的形態、情報の恣意性、危うい人間関係などはもとより、存在論にまで高めうる「どこにも自分のいるべき席がないのだ」という一面の真実が抉りだされている。これはただちに「いくべき場所のない人間はどのような生きるべきか」という一種窮極の問いかけに連続する厳しい設問である。

ペテルブルク情景の点綴といった遊戯と異って、作者は、民衆論のテーマを『日記』でさまざまな展開していた。それは分析を割愛した右の二短篇小説とモチーフは類似している。つまり、一つの発想を論理的に考察し、また闊達な想像力で補強しつつ、その機微や印象深い人間像を造型することの必要性を感じ、何気ないところに潜む肝腎な生の形と民衆の輪郭を描出す

る試みである。そこに作者は文学上の観点ばかりでなく、自己の生き方にかかわる基本的で深い独自の意義を見出したかもしれない。「百姓マレイ」がかかれている所以である。そして、この短い小説は、『日記』のなかでも最も多くの人に愛された作品であることは断るまでもあるまい。

すでに示したように、作者は一つのアネクドット、「要するに、一つの遠い昔の思い出にすぎないのだが、わたしはなぜかそれをとくに民衆論の結びとして、今ここで語りたくてたまらない。」という。ペトラシェーフスキイ事件に連座してシベリア流刑になり、監獄にいた二十九歳のときの思い出を通して、九歳の少年時のある出来事を想起する仕掛けになっている。語り手は「これまで一度も印刷物の上で、自分の牢獄生活を語ったことがない。十五年前に書いた『死の家の記録』は、自分の妻を殺した犯人という、仮想の人物の物語ということになっている。」と注釈しつつ、ただ一点に光を当てるかたちでペンをすめる。

語り手はときどき夢にまで見る情景を想起する。シベリアには珍しく太陽が高くあたたかく、輝かしいにもかかわらず彼は「心のうちは限りなく暗澹としていた」鬱屈した心的状況から叙述しはじめる。その印象深い場面は光明週間の祭のおりで、囚人たちは酒に酔いつぶれ、彼はその全体の雰囲気神経をささなまれつづけていたのであった。ことに「百姓らの酒飲み騒ぎを見ると、いつも嫌悪の念を禁じ得なかったが、こういう場所では、なおさらその感が強かった。」彼自身の心中に憎悪の念が燃えあがりはじめたころ、たまたまポーランド人の政治犯が「わ

たしはあの無頼漢どもを憎む。」と小声で彼の耳に囁きかけた。ロシア人の彼らよりポーランド人がいかに迫害されていたかという背景ぬきには解りにくい消息ではある。とまれ、ちょうど騒ぎがおこり、頑強このうえない韃靼人のガージンが瀕死の状態で寝板でくたばってしまう事件に遭遇した。ガージンは右の作品のなかで非常に特異な相貌において描出された印象的な人物であるが、それらをふくめて「牢獄生活の四年間に、わたしは絶え間なく自分の過去を追想していた。そして、この追想の中で、自分の過去の生活を残らず新たにくり返したものである。」と記す。苦痛と悩みのなかで、当然のごとくに「が、なによりもかんじんな点は、それを訂正したことである。わたしは絶え間なく自分の過去を訂正した。それがわたしにとってなにより楽しいみだったのである。」ともいい、この追想の中に九歳のころの出来事が天啓のごとくに浮かんできたのである。ここに彼の民衆のイメージが画然と浮彫りにされることになる。

追想のなかの風景はにおやかで美しく、人々は広い心をもって少年に接してくれていた。

「わたしはこの世で森ほど好きなものはない。きのこ、野苺、甲虫、小鳥、針鼠、栗鼠、それから、なんともいえぬほど好ましい朽葉の湿っぽい匂い……わたしはこれを書きながらも、村の白樺林の匂いを嗅ぐような思いがする。こうした印象は一生涯きえることはあるまい。」

とつぜん、深い深いしじまの中に、わたしは『狼が来る!』という叫びを、はっきり、まざまざと聞きつけたのである。

わたしは驚愕のあまり、われを忘れて、きゅと声を出して叫ぶと、例の畑をおこしている百姓を目がけて、林の間の空地へと駆け出した。

それはうちの百姓のマレイであった。」

これまで一度も口をきいたことのない五十歳ばかりのマレイは、狼などいない、空耳にすぎない、「さあ、キリストさまがついてござっしゃる、十字切るだよ」と彼の頬をなで、ひきつる唇を土で汚れた太い指で触ってくれたのであった。そして、落ちつきを取り戻してその場から立ち去る彼の姿が消えるまでやさしい微笑みをたたえた顔でおくてもくれたのであった。

「ところが、今二十年もたった後、しかもシベリヤの涯で、この邂逅をこうまでまざまざと、最後の一点すらもらさずに想い出したのだ。してみると、この邂逅は、自分でもまるで、意識しないのに、しぜんに、いつともなくわたしの心の底にひそんでいて、ちょうど必要な時に突如として浮かび出したのである。あの貧しい農奴の優しい母親めいた微笑、彼の切ってくれた十字、そのうなずき、『ほんに、はあ、おったまげたこんだべ、な、ぼん!』といった言葉、それがいま記憶に浮かんだのである。」

語り手はこのマレイを登場させた意図をつぎの叙述にこめているであろう。「当時まだ自分の自由のことなどはまるで夢にも思い設けていなかった、獣のように無知で粗野なロシアの農奴

が、どれくらい進化した人間らしい深い感情と、どれくらいこまやかな、ほとんど女のような優しさに胸を充たしていたかは、おそらく神のみが高いところからみそなわすばかりであろう。」そして彼は、忽然として不幸な囚人たちをまったく別の目で見る事ができるようになったのである。「急になにかある奇跡によつて、あれほどの憎悪と毒念がわたしの胸から、残りなく消えたような気がした。」つまり、彼は、この囚人たちもマレイとおなじ心をもった人間かもしれないという類推力を目ざめさせられたのである。それが彼の民衆発見にほかならなかった。いわゆるものの見方、感じ方、考え方の根底的な転換の体験、この奇跡に似た不可思議な魂のありようを作者は語りたかったのである。

もとより、このような叙述は、作者の思想的転換や自己の奥深い未明の根源にひそむものの探求として価値づけられる。また、大きな構図でいえば、一八四五年（発表は翌年一月）処女作『貧しき人々』の執筆、ベリンスキ、ネクラソフなどとの親近と不和、ペトラシェーフスキ、グループへの接近・加入、その急進的部分のスペシネフ、ドゥーロフなどの活動、周知の「ゴーゴリの手紙」の朗読、出版の自由、農奴の解放、裁判制度の改革などの見解、皇帝直属官房第三部による逮捕・裁判とセミョーフスキ練兵場での銃殺刑の宣告と特赦令、シベリアでの四年間の監獄生活と五九年までセミパラチンスクなどへの流刑からペテルブルク居住の許可・帰還など、ほぼ青年期から壮年期の十五年間以上ほどの時間的拡がり視野におくことができる。日本特有な概念に重ねていえば、ドストエフ

スキイの思想的・政治的転向の問題とその精神的葛藤の核心部分とその闘いの軌跡を内包している貴重きわまりない時期にほかならない。『罪と罰』の信念の更正などを引き合いに出して、ある観念世界を作り上げるのはそれほど困難なことではない。

あるいは、そのヒューマニスティックな感性、ないしはロシア的なものを云々できる。ロシアの民衆、スラブ的なものと彼がいうときの、明確な一つの範型でもありうる。フォークロアの世界、森の中で「狼が来る!」という幻聴を生きたこと、それらはロシアの民衆が語り伝えていた世界そのものであり、それらが生き生きとここに蘇生しているのである。いわば、『日記』を貫流する観点がここに示されているというべきかもしれない。小説のかたちで書いたことのうちには、作家の思考方法や表現技法を示す深い深い秘密がかくされていたといえるのである。

『作家の日記』の独自性は、ドストエフスキイの小説世界と密接な関係をもつものである、ある凝縮をこうむった小世界が展開されていることにある。「ボボーク」のような死後の世界、「宣告」のような『カラマゾフの兄弟』のイヴァンの叛逆とニヒリズムを髣髴とさせられる厳しいありよう、「百姓マレイ」のような民衆像の探求、信念の更正、フォークロアの世界の徴表などめざましい限りである。

さて、「おとなしい女」は、そうした観点からまず一摺みにしてみると、ジェイムズ・ジョイスなどの二十世紀の小説（家）が発明した「意識の流れ」の基本的な考究法が顔をのぞかせている。作品の表面をさつとなざると、ここでは分析をあえて割

愛するが、「現代の婦人に恩恵を受けた男の一人」と同様に、この作品も十九世紀の女性の一つのあり方、《叛逆と独立》を渴望する女性の生き方、あるいは自立を求めざるをえない先進的な条件を課された女性を基盤にしている。そうした女性との関係における過渡期のロシアの都市生活者の一面が活写されているということもできよう。

作者は冒頭の「著者より」で、しばしば現実的なものと空想的なものとの差異について述懐するように「この物語を最高度に現実的なものと考えているくせに、『空想的』という傍題を冠した。」と注している。その所以は「このなにかも書きつけた速記者という仮定（後でわたしがその書きつけたものを推敲したとして）、これこそわたしがこの物語において、空想的と名づけるものである。」とも付け加える。ここにこの小説における作者の叙述の技法が確定され、わたしたちは『賭博者』の書き方を髣髴とさせられる。というよりも、この感じたことを次々に速記的に叙述していく技法のうちに、右に指摘した「意識の流れ」的な技法が、いわば無意識の世界と意識の世界の浮き沈みや交錯の微妙なありようとして浮彫りにされるのである。理性や認識をこえた不分明な意識の闇の動きや領域が、凝縮された時間の流れとともに浮上させられている、といいかえてもよいのである。ともあれ作者は、主題としてつぎのようになる。

「まず一人の夫を想像していただきたい。その妻は数時間前に窓から身を投げて自殺し、遺骸がテーブルの上に安置されているのである。彼は動顛してしまつて、まだ自分の考

えをまとめる暇がない。彼は部屋の中を歩きまわりながら、この出来事の意味を発見しよう、『自分の考えを一点に集中しよう』と努めているのだ。おまけに彼は、自分で自分を相手にしゃべるといったふうの、病い膏肓に入つたヒポコンデリー患者である。（中略）やがて次第次第に、彼は實際、事件を自分自身に闡明して、『思想を一点に』集中してくる。彼の幾多の追憶は、ついに否応なく彼を眞実へ導いてくる。と、眞実は必然的に彼の理性と心情を高めていく。」

これまで人から愛されたことのない嫌われ者の孤独な主人公は、かつて名声を失墜して退官屈をだして連隊から追放された。「恥ずかしい思いをするなら、うんと恥ずかしい目をしろ、屈辱なら屈辱けっこう、墮落するなら、徹底的に墮落しろ、悪けりや悪いほどいい」という態度に徹して三年間沈湎していた。たまたま教母にあたる人の遺産が入り、富において名誉と社会的位置を回復し、地位を確乎としたものにすべく、質屋を開業することにしたのである。徹底した墮落論を垣間見ることができ、職業に誇りを見出しえないにしても、傲慢さの背後で、結婚にあたって彼の真に願っていたことは、人間同士の深い愛、妻の愛、家族の絆であつたということができる。

短篇小説の筋立ては、世襲貴族で一本立ちのできて四十歳の男と、官吏の父親と母を亡くしてだらしない叔母のもとに残された十六歳の乙女の年齢の離れた夫婦の誕生から、少女の男に対する違和感や軽侮の思いと離反・反抗、男の絶対的な意志による同じ部屋に居住しつつの婚姻の解消状態、

絶望状態にあつて男にピストルを一度は向けたこと、少女の虚脱と逼塞、それにつづく突然の身投げによる死にいたる物語である。プロットそのものは奇をてらつたものではないが、夫婦としての関係はきわめて特異だといえる。男は貧困のどん底にある、心だての優しい大きな空色のもの思わしげな目の少女を救いあげたと傲慢な思いに満足しきつていた。彼は退官の原因になつた馬鹿げた決闘の回避と結婚にいたる関係をつぎのように説明する。「それを自白するのがいやさに、みんなを苦しめ、またそのために彼女を苦しめた。彼女と結婚したのも、その腹いせに彼女を苦しめようがためだったのである。」この罪の意識はもとより重く、自省は深くなつたのは確かである。

ともあれ、男は、夫婦関係を建てなおそうと質屋を廃業して新しい生活を始めようとするが、自己の空想に酔いしれるのみで、少女が身投げせざるをえない淵にまで追いこまれていたのが認識できなかった。「何よりもいまましいのは、すべてが偶然だということである、——単純な、野蛮な、蒙昧な偶然だということである。これが癪にさわる！ 五分、たつた五分だけ遅れたのである！」この時間の差で彼は彼女の遺体を目前にすえて、あれこれ追憶し、事態の意味や自己と少女の生の本質を全的に把握し直すように追いこまれた。その一つの帰結が、彼のこの世の法律、習慣、国家、信仰などに対する呪詛と離縁の決断に繋がつたのである。彼の語りの渋滞や支離滅裂さ、本質からの離反と細部への拘泥などが、端的に彼の内的な時間の距離統御の喪失を印象づけている。それが逆に、めざましい小説技法の端緒を印づけることになつたのである。

さて、『日記』でもっとも優れた小説というべき「おかしな人間の夢」には、「百姓マレイ」にあつてフォークロアの世界が息づいているとすれば、それとは趣を異にする神話的世界が出現しているといつても過言ではない。作者が『未成年』のヴェルシーロフや、『悪霊』のスタヴローギンなどの口を通して夢想し素描した「黄金時代」とその輝かしい夢に近似した未知の闇を開示したからにはほかならない。あるいは、これから作者が書くことになる『カラマゾフの兄弟』のイヴァンの悪魔が提出する「地質学上の変動」に近似の恐るべき悪夢だともいえる。ともあれ、小説において夢見られた黄金時代とはどのような相貌を呈し、何であつたのか。

「太陽の子、おのが太陽の子、——おお、なんと彼らの美しいことよ！ おれはわれわれの地球上で、人間のこのような美しさを、かつて見たことがない。（中略）それはまだ墮罪にけがされない土地であつて、そこに住んでいるのは、罪惡を知らない人々なのだ。全人類の伝説によると、われわれの祖先が墮罪の前に住んでいたのと、同じような樂園に住む人々なのだ。」

主人公は「宣告」の語り手のように、意識することの罪・惡を何ものから鋭く刻印された人間であつた。否定哲学の信奉者で、退屈のために、また自然の惡意に反抗して自殺しかねない呪われた男でもあつた。その男だからこそ、逆にこの「樂園」が対照的に光輝を帯びるのである。

のつけから、彼が「おれはおかしな人間だ」と主張するのにもむべなるかなと思わせる狂的な人物である。しかしギリシアの多島海を思わせる黄金時代のイメージを把持する彼は、これまで誰も見たことがないし、知らない「真理」を自分だけが知っている不幸のためへおかしいのだと主張するのも解らないわけではない。「いったん真理を知り、真理を見た以上、それはあくまで真理であつて、眠つていようと醒めていようと、それ以外の真理はあり得ないではないか。」彼のそれまでの生の軌跡は、また教育・学問の研鑽は、夢のなかの真理に拘泥する彼がいかにおかしい人間であるかという内実の開示、存在のあり方の証明にしかならなかったという。

彼は認識のある秘密、たとえば「十一月三日」という日付のある日に真理を悟つたという天啓的眞実を吐露する。ドストエフスキイの小説で、日付はさまざまな要素を賦与されているが、ここに示されている日付は、『悪霊』のキリーロフが、「先週の火曜日、いや水曜日です。」といい、時刻が丁度二時三十七分であつた時に幸福を感じた、そしてその体験が彼の思想の核心を形成したのだ、と主張するのと等しい。つまり自己のあり方を全的に直覚したという感覚にめされる不可思議な閃光に似たものと等質である。不可思議とのべたが、主人公の夢のなかに、現実の痛みと夢のなかの痛みの区別、睡眠の独自なありよう、自殺の動機などのような知覚から認識にわたる一つの秘密が示されているというべきであらう。

ところが、主人公の把握したその眞実は夢のなかで生起したもののだが、「樂園」に象徴されるように、それは異世界、異宇宙

の、いわば反世界、反宇宙のイメージの先験的把握というべき性質を帯びている。物語を前にもどすことになるが、夢のなかで彼は自殺をして埋葬されたのちに、何ものかの手によつて墓が開かれて、その実体がなにか不明な存在に抱きかかえられたまま、暗い未知の空間を飛翔しつつあつたのである。つぎの記述の内包する世界は、狂氣の目の産物ではありえない。

「見ると、思いがけなく、わが太陽が目にはいるではないか！ おれは、これがわれわれの地球を生んだわれわれの太陽であり得ないことを知っていた。おれたちは、われわれの太陽から、無限の距離にへだてられているのだ。にもかかわらず、おれは自分の全存在をもつて、これはわれわれの太陽とまったく同じようなものである、その反覆であり、双生児であるということを知つた。甘い呼び招くような感情が、おれの魂の中で歓喜の曲をかなではじめた。光、おれを生んだ光のなつかしい力が、おれの心の中に反応し、それをよみがえらした。おれは生命を感じた。」

異地球、異宇宙の生命の源としての光とこの生命感の感受こそ、芸術、小説、詩などでしか為しえない表現感覚にほかならない。いや、めざましい実存・存在感というべきかもしれない。

結局道徳的・宗教的な罪悪を知り、あまつさえ意識の悪に染まつた否定哲学を信奉する彼が、この人々にたいする墮罪の要因となつた、「豚に寄生するいまわしい旋毛虫のように、数々の



国に病毒を伝染させるペストの黴菌のように「罪を蔓延させ、人々の樂園を汚してしまったのであった。あえて付け加えるが、この「旋毛虫」のイメージも作者の特有な想像力の核を形成していて、目にみえないかたちで支配する奇怪な力を鋭く暗示するであろう。彼らは、無垢なる人間と存在のあり方を喪失したのである。苦悶や苦悩、悲哀、さらには正義の観念を発明し、法律を定め、自己愛を徹底化させたり、奴隷制度を打ち立て、理念や富を尊重することによって互いが争い、戦争を起こしつづけるまでに墮落してしまつたのである。そのうえ、「これらの人々は、苦痛は美である、なんとなれば、ただ苦痛の中にのみ思想があるから、と高唱した。彼らは苦痛を歌にうたつた。」のである。いわば、彼が住んでいた地球の人類の歴史がくり返されるのを、痛みをもって確認し、それらの人々に「樂園」への回帰をといても、今度は逆に彼らから危険視され、「瘋癲病院へ入れてしまうぞ、と宣告」されるにいたつたのである。

いいがたい悲しみで死にそうになつて目ざめた彼が、ピストル自殺を拒否して、つぎのように決心するのも自明のことである。

「おお、いまこそ生きるのだ、あくまで生きるのだ！ おれは双手を挙げて、永遠の真理に呼びかけた。呼びかけたのではない、泣き出したのだ。狂喜の念、はかり知れぬ狂喜の念が、おれの全存在を揺りあげた。そうだ、生活だ、そして伝道だ！ 伝道ということに、おれは即座に決心した。」

彼が伝道にこだわるのは、たとえば『悪霊』のステュパン・トロフィーモヴィチのように、街道には思想があり、その思想を求めてたまたま知り合つた『聖書』売りとともに『聖書』を売り、街道を彷徨いながら伝道にたずさわろうとするのではない。彼はだれにも譲り渡しえない恐るべき真理を知つていて、それを人々に知らしめなければならぬという絶対的な使命を抱いてしまつていたからである。それが狂気をもたらし、その狂気と恐るべき覚醒の間に、彼の夢に賭けた生と存在の真実が刻印されているからでもある。

さて、「おかしい人間の夢」は、極端化していえば、作者の創造した明快な世界・宇宙のあり方であり、一つの世界・宇宙のモデルの提示にほかなるまい。彼はさまざまな世界像を創り出したが、これらの短篇小説群は、一つのゆるぎない想像的世界の在りようと、読者をして自らの創造に駆りたてられる十分な力を内包している。作品群は独特な意義と未来の可能性を示しているといえるのである。

駆足で素描したが、『作家の日記』の作品群が、いかなる力を揮つてか、彼の長大な小説群と一体となつて、二十一世紀にまで生き延びつづけようとしている。その秘密に推参することは、困難にみえながらも、ある回路を見出すことで乗り越えることが可能であろう。その発見の努力こそ、わたしがドストエフスキイの作品世界をさまざまな方法や視点から判読する試みにほかならない。次には、まったく異つた表現者の貌をよみとるようになるであろう。

(たていし はく・文学部教授)